

元気で無事帰れた。氏神様に御挨拶をしてお礼を申し上げ、びっくりして喜ぶ家族との対面は、時に昭和二十二年一月五日でありました。

結婚は昭和二十三年四月。子供は女三人。孫六人。妻も元氣。米、野菜は自給自足。老後の楽しみはカラオケ。父が盆踊りの音頭とりをしていたせいか唄が好きです。

先にも述べましたが、いまだに毎年の戦友会である時の仲間六人集まっては、ネズミを六人で食ってうまかった、と懐かしむのです。

昭和十九年八月、佳木斯出発時の第二大隊砲小隊の編成人員は四十四人であった。昭和二十一年十二月、佐世保港上陸時の人員三十人であり、その差十四人が帰らない英霊です。損害率約三割強、その全部が栄養失調、マラリア、赤痢等で、正に本編労苦の本質は飢餓・悪疫との戦いでした。

比島の山間に散華した若き英霊の無念とその遺族の傷心、不幸をこの機会に平和の礎の紙面を借りて語り

伝え、慰藉と慰霊の一助にも、と希うものです。

近づく八月十五日の全国戦没者追悼式典を控え、切に平和を祈念し、日本の安泰を希求するための誠を捧げて止みません。

## ハイラル第八国境守備隊

島根県 藤原 幸一

私は大正七（一九一八）年九月二十二日生まれです。から昭和十三（一九三八）年徴集兵で、徴兵検査の結果、甲種合格で歩兵の軽機関銃兵になりました。

当時の我が家は農業で米作が主で、田一町歩、畑三反、山林が六町歩ありました。家族は母と私と弟（海軍戦死）妹四人の七人でした。父は私が十六歳の時に急死したので私は高小卒業後、直ちに家業を継ぎ、週二回の青年学校に通いました。

弟は私より三歳下ですが、昭和十三年五月、海軍に志願して呉の海兵団に入団しましたので、私が現役入

隊すると留守家庭には男手がなく女だけになるので、それが心配でした。

昭和十四年二月、大阪難波別院に集合。満州から引率役の人の指示で昔の軍服のゴワゴワしたものを着せられ、ダブダブのズボンをはかせられ、丸腰で貨物船に乗せられ大阪湾を出港したのが二月二十五日でした。行く先は満州国ハイラルにある国境守備隊のとこで大連に上陸、途中列車にて四平街、興安嶺を越えて砂漠の街ハイラルに到着したのが大阪を出港してから十日目の三月七日でした。

関東軍第八国境守備隊第三地区歩兵隊第三中隊が、私の現役入隊先であります。司令官は陸軍中将安井藤治閣下、地区隊長は陸軍大佐仁保進殿でした。私達初年兵は中隊に七十人でした。

ハイラル陣地は対ソ戦に備えた施設だけに、地上陣地は地下陣地に通じたコンクリート製の堅固なもので、電気、給水、通風、食糧庫、弾薬庫等すべて完備した立派なものでした。

司令塔には本部が入っていました。中隊の将校、下士官は全員現役で召集で来ている人は一人もおりませんでしたから教育も極めて厳格で、また兵隊も体格が大きい人ばかりで、現役ばかりの精鋭部隊でしたから気合の入った一期の教育が始まりました。

ハイラルの外気温は三月ですと零下三〇度、夜明け頃は五〇度になり、小銃を素手で握ると手の皮がひっつきはがれる程です。手袋は三枚重ねた上に防寒手袋の大きなやつを重ねるのです。

教練は隊の主眼が攻撃ではなく守備隊ですから自然と守備本位の訓練が主体になっていました。

戦闘訓練も夜間が多く、眼の夜間視力を増すための夜間演習を繰り返しているうちに夜でもよく見えるようになったのには驚きました。夜間演習の時は昼間寝かされました。

毒ガス戦の訓練も地上一〇センチまでガスが来ないからと地面をナメるように這い回りました。

国境守備隊の兵隊は「陣地で死ぬことが本分であり任務である」と教育され、一年に一回必ず遺言を書か

されました。

一番辛かったのは冬の立哨でした。早く上等兵になって立哨せずにするようになりたかった。

初年兵教育が始まって間もなく五月十二日から「ノモンハン事件」が起こり緊張感が溢れてきました。

第八国境守備隊には地区守備隊と野戦隊があり、野戦隊は戦況に応じて出動してゆき、隣の兵舎は空き家同然になりました。停戦になっても帰って来なかったのですから全滅したのだと思います。

ノモンハンはいラルから南へ二五〇キロ位離れています。初年兵の一期の検閲は事件が収まってからということになり、初年兵も古年兵について事件勤務に従事ということになりました。

同年兵で速射砲隊に入った者は、ソ連の細菌戦のため腸チフスに罹り、ハルビン陸軍病院に後送されたが死んでしまいました。

はいラルから二四〇キロも離れた前線ですから水が

全く無く、テントに溜った露を集めて炊事をする始末でした。顔を洗う水もなく皆ドス黒い顔をしていました。ハルハ河の泥水が給水班の濾水器を通すとキレイな水になるのに兵隊は感嘆の声を上げていました。

私達も状況に応じて後方勤務に従事することになり、はいラル駅に到着した爆弾を疎開するために決死隊の募集があり私も応募しました。イペリット弾や催涙弾の疎開も危険なので決死隊になるのです。

第六軍臨時兵站南屯出張所に配属された時は、砂漠の真ん中ですから水は無く、兵隊は皆ドス黒い顔をしていました。

昼は敵機の来襲があるので夜間作業が多く、翼の折れた飛行機が運ばれたり、負傷者の一団が到着すれば病院に運ぶ手配をしたり、また前線に水を送るためにタンクをトラックに乗せたり忙しい毎日でした。

日本の戦闘機は優秀で最初のうちは空中戦でも墜るのは敵機ばかりで「万歳！」をしていましたが、だんだん日の丸機の数が減り始め、敵の空襲が多くなってきました。日本の補給が間に合わなくなってきたので

す。翼の折れた飛行機が後送されて来ると悲痛な思いにさらされました。

敵を目前にした訓練は、専ら接近戦の訓練に明け暮れました。完全軍装の部隊が連日続々と前線に向けて行軍して行きました。貨物自動車も物資、弾薬を満載して走って行き、大砲も索引車に引かれて行きましたからこれから本格的な戦争になると思われました。

捕虜になったソ連軍将校二人が病院に入っているので歩哨に立ちましたが、上官から国際条約に背かぬよう捕虜の取り扱いに慎重にと注意を受けました。モンゴル兵の捕虜もいましたが隊の営倉に入れられていました。

軍隊の食事は麦飯でしたが、安井閣下の当番になった時と季王琅殿下や東久彌宮殿下の当番になった時の三回だけは、白い飯を飯茶碗で食べた事は鮮明に覚えています。三年三カ月の軍隊生活のほとんどは麦飯にアルミの碗で過ごしただけに……。

前に述べましたように、我が第八国境守備隊は関東

軍の精銳の中の精銳と、名高い体格抜群成績優秀の職業軍人ばかりの将校、下士官に鍛えられたお陰で、私も入隊一年で待望の上等兵になり、二年目で兵長に、二年目に現役で伍長に任官の栄を賜りました。

その間、剣術第一種（三段）を与えられました。三段になると初段までの免許が許されるのです。また精勤章三本と善行章（賞状）一枚を授与されました。

昭和十六年になり関特演が始まるとハイラルの兵隊も四万人を超す程になりました。

私も一生職業軍人で過ごす気になり再役して憲兵になり情報将校になろうと思っていたら、人事係准尉から「只今、任官手続きをしているから止めておけ」と言われたことがあります。当時は親の再役願いがあれば再役できたのです。

同年兵の安井武男は再役してロシア語学校に入ったため、終戦後シベリアに抑留された際、ロシア語学校の名簿がソ連諜報部にありスパイ容疑で二十五年の刑を受け、最終引揚船で昭和三十一年に帰国しています。

もし私が憲兵になって情報将校になっていたら安井と同様の目に遭っていたらと思うます。

昭和十七年四月、内地帰還（満期除隊の為）となり、名古屋初空襲の一週間後の四月二十五日名古屋に着。ラッパ手を先頭に第六連隊まで凱旋行進をした時は、今までの苦勞がいつべんに吹き飛んでとても良い気持ちになりました。たまたま一週間前には米機による名古屋初空襲があった。

四月二十九日、満州から着てきた軍服を返納し、帰宅用の服を借りて名古屋を出発、途中大阪下車し、食堂に入ったら「御苦勞さんでしたね」と飯の大盛りをサービスしてもらい、涙が出た記憶があります。

三年ぶりの出雲横田の我が家に帰り、母の元気な姿を見て安心しました。母も大変喜んでくれました。妹達も元気で迎えてくれました。

弟は志願で昭和十三年五月呉海兵団に入り、戦艦「伊勢」に乗艦、その後、南方の陸戦隊に移る時、横須賀から「兄様に会えず残念だ」と母妹宛に手紙が来

たのが最後で、昭和二十年五月〇〇群馬で戦死の公報が来ました。

私は満期除隊して一カ月後に地元横田町の青年学校の常勤指導員となり、後輩達に軍事教練の教官として銃後の一端をにいました。昭和十八年三月には同校の助教員に昇格、以後二十年十二月三十一日まで勤めました。

昭和四十八年十月には横田町議会議員に当選、現在は横田町商工業協同組合の組合長理事を勤めております。母は三年前百八歳で亡くなりましたが島根県最高齢者でした。

現在所有の田畑は契約栽培でやっています。息子は広島でIT産業を経営しており、長女は東京で地下鉄営団に勤めております。

私の軍歴は除隊後の青年学校教員が軍歴に算入されないのが恩欠者になっています。終戦まで召集が来なかったのが不思議に思っていますが、同時除隊した仲間でも召集受けて戦死した者がいることを思うと、現

在ある我が身を幸せと思わざるを得ません。

## 満州従軍記

愛媛県 竹田 永一

私は、大正十（一九二一）年十月十一日、愛媛県に生まれました。昭和十六（一九四一）年徴兵検査を受け甲種合格でした。和船を造る船大工を業としていました。

昭和十七年一月十日、高知市の西部第三十四部隊河野隊へ現役入営。第一期の検閲修了後、三日間の休暇を与えられ外泊、帰郷。家族と嬉しい名残つきない朝夕を過ごしました。

四月二十八日、高知屯営を出発、連隊長殿の訓示後、勇ましいラッパを先頭に高知駅まで行進。沿道いっぱい市民の励ましを受け、列車輸送で坂出へ。四月二十九日の天長節の佳き日、輸送船に乗船、坂出港出帆、途中恙なく朝鮮釜山へ上陸。小学校に一泊。

列車輸送で六日目に、満州国閩島省延吉着。満州独立守備歩兵第二十一大隊第一中隊へ入隊しました。

昭和十七年、十八年は教育と警備勤務に余り変わらない毎日でした。十八年暮に派遣先より呼び戻されて帰隊しました。隊内は南方転出にゴった返していました。同年兵が一装用の晴れ着に数々の携行品を支給され、嬉々としておりました。

部隊に南方転出の動員が下り、第一中隊は残留中隊になり、特殊な通信、暗号、砲、機関銃等の教育を受けた者は抽出されました。そして体の悪い者、入院中の者などが第一中隊に編入されました。三年兵（十五年兵）が満期予定で、池田中尉に引率されて弘前に転出、中隊は六十人余りの淋しい中隊となり、正月を迎えました。

弘前編成の部隊が新しく渡満して来て、満州独立第六十九兵站警備隊に一括転属となり、その傘下に入りました。我々現役兵と比べると十歳位は上の召集兵ばかりの部隊でした。当時の中隊は解散して新しく第二中隊となり、現役兵は各中隊に分散し、召集兵混成中